

日本人の意識・40年の軌跡(2)

～第9回「日本人の意識」調査から～

世論調査部 高橋幸市／荒牧 央

NHKが1973年から5年ごとに行っている「日本人の意識」調査の最新の結果を2回に分けて報告する。2回目は政治、ナショナリズム、基本的価値観を取り上げる。

選挙やデモ、世論などの人々の行動が、国の政治に影響を及ぼしていると感じている人が、2000年代に入って増えている。国の政治が取り組まなければならない課題では、「経済の発展」を挙げる人が最近の5年間で増え、「福祉の向上」は減少した。また、「人間らしい暮らしをする」という生存権が、憲法で決められた権利であると感じている人は80%近くいるが、表現の自由と団結権についてはそれぞれ36%と22%にとどまっている。

「日本人はすぐれた素質をもっている」、「日本は一流国だ」と考える人が前回に続き増え、日本や日本人に対して自信をもつ人は、過去最高だった83年の水準に近くなった。また、天皇に対して「尊敬の念をもっている」という人も34%と前回に続き増え、昭和時代の73年の水準に達し、「好感をもっている」と並んだ。

親せきや職場の同僚と「なにかにつけ相談したり、たすけ合えるようなつきあい」が望ましいという人が最近の5年間でも減り、隣近所と合わせて、密着した人間関係を望む人は40年間で大きく減少した。

また、前回調査から今回の間に東日本大震災が発生したが、これまでと異なる変化を示している項目は少なく、「日本人の意識」調査でとらえている意識領域においては、震災の影響が顕著に表れているとは言えない。

7月号に続き、2013年10月に実施した「日本人の意識」調査の結果を報告する。7月号では男女関係、家庭像、夫婦・親子関係を取り上げたが、今回は、政治、ナショナリズム、宗教、基本的価値観について報告し、最後に、意識変化の全体的な特徴について述べる。

調査は1973年から5年ごとに、全国の16歳以上の国民5,400人に個人面接法で行っている。実際に使用した質問文と選択肢、9回分の単純集計結果は7月号に掲載した。

は大きく変化した。07年の参議院選挙において民主党が勝利し、参議院では第1党となっていたが、09年に行われた衆議院選挙で308議席を獲得して圧勝し、民主党を中心とした政権が発足した。ところが10年の参議院選挙で自民党が勝利して、再び衆議院と参議院の多数党が異なるねじれの状態となり、12年の衆議院選挙では自民党が294議席を獲得し政権に復帰した。

この間、国民の政治意識はどう変化したのだろうか。まず国民が、自分たちの行動がどの程度政治に影響を及ぼすと感じているのかからみていきたい。調査では、「投票すること(選挙)」、「デモや陳情、請願(デモなど)」、「国民の意見や希望(世論)」の3つが、国の政治にそれぞれどの程度の影響を及ぼしていると思

I 政治意識

1. 政治に対する影響

有効性感覚の低下が止まる

前回08年の調査からの5年間に、政治状況

うかを、下記の選択肢の中から選んでもらっている。選択肢の順番は、調査で実際に提示した順番である。

○「選挙」, 「デモなど」

1. 非常に大きな影響を及ぼしている《強い》
2. かなり影響を及ぼしている《やや強い》
3. 少しは影響を及ぼしている《やや弱い》
4. まったく影響を及ぼしていない《弱い》

○「世論」

1. 十分反映している《強い》
2. かなり反映している《やや強い》
3. 少しは反映している《やや弱い》
4. まったく反映していない《弱い》

(《 》は選択肢の略称)

これらの質問で1の《強い》または2の《やや強い》を選んだ人は、国民の行動が国政に影響を及ぼしているという感覚(有効性感覚)が強い人であり、図1にその割合を示した。

「選挙」, 「デモなど」, 「世論」のいずれも73年が最も多く、その後は長く減少傾向にあったが、2000年前後からは様子に変化がみられる。

「選挙」は、影響を及ぼしていると考える人

が73年の66%から減り続けて98年と03年に41%となった。しかし08年には48%へと増加に転じ、今回もその水準を保っている。「デモなど」も73年の47%から98年の22%に減少した後、08年には27%まで回復した。今回は24%に減少したものの、03年と同じ水準を維持している。「世論」は、73年の時点でも反映していると考える人が21%と少なく、その後も減少していたが、今回、若干ではあるが初めて増加し12%となった。

このように、最近10年間は、影響を及ぼしていると考える人がすべての面で減少し続けていた90年代までとは様相が変わってきている。ただし、最も多い「選挙」でも、影響を及ぼしていると感じている人は今では半数にとどまっていることに留意する必要がある。

ここで、「選挙」, 「デモなど」, 「世論」のそれぞれの回答に対して《強い》=3点, 《やや強い》=2点, 《やや弱い》=1点, 《弱い》・「わからない」, 無回答=0点という点数を与え、それを合計して得点化した結果をみえる。この得点が高いほど、「国民の行動が国の政治に影響を及ぼしている」という感覚が強いことになる。調査回ごとの平均得点を計算すると、98年、03年が低くなっており、その後はやや回復している(表1)。

図1 政治に対する有効性感覚《強い》+《やや強い》〈全体〉

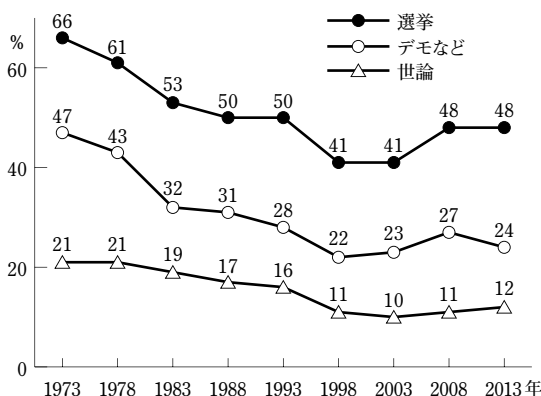
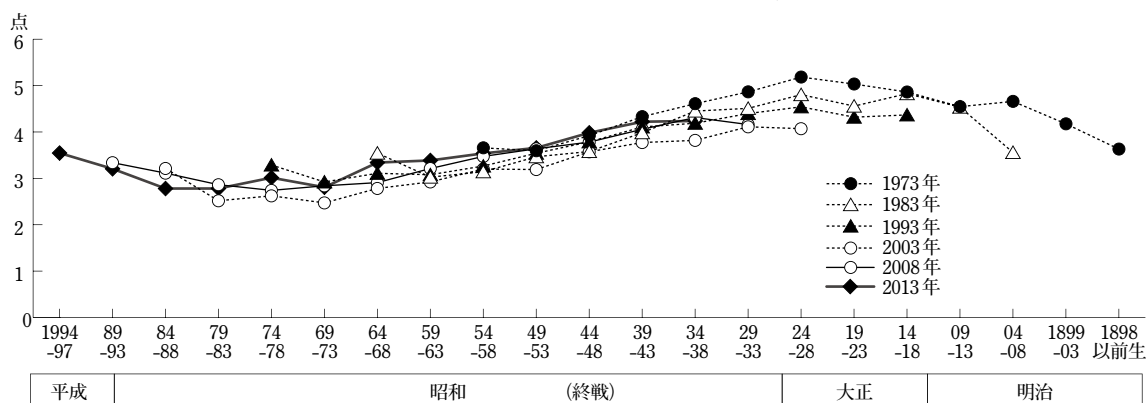


表1 政治に対する有効性感覚スコア〈全体〉

73年	78年	83年	88年	93年	98年	03年	08年	13年
4.41	4.29	3.94	3.77	3.73	3.24	3.31	3.51	3.57

平均得点を生年別に示すと図2のようになる。各調査の線は同じような形でほぼ平行しており、「24-28」年生まれの辺りをピークとして、そこから新しい世代になるにしたがって低くなっている。そのことから、政治に対する国民

図2 政治に対する有効性感覚スコア〈平均得点、生年別〉



の行動が有効だと感じるかどうかは世代による影響が大きく、新しい世代ほどそのような感覚をもたない傾向にあると言える。

ただし、各調査の線は完全に重なっているわけではなく、上下方向にずれており、時代の影響も受けていることが分かる。08年や13年は03年に比べて線が上のほうへ移動し、全体的に有効性感覚が上昇している。また、08年や13年の結果では線の左端のほう、生まれ年で言えば1980年代以降の世代で得点がやや高くなっており、すぐ上の世代に比べて政治的行動が有効だと感じている人が多い。表1のように08年以降得点が高くなったのは、多くの世代に時代の影響があり、かつ新しい世代で有効だと感じる人が多くなったため、政権交代などの動きと連動していると考えられる。

2. 政治課題

「経済の発展」が「福祉の向上」を上回る

日本の政治が取り組まなければならないいちばん重要なことは何か、以下の7つの中から1つだけ選んでもらっている。

1. 国内の治安や秩序を維持する

《秩序の維持》

2. 日本の経済を発展させる《経済の発展》

3. 国民の福祉を向上させる《福祉の向上》

4. 国民の権利を守る《権利の擁護》

5. 学問や文化の向上をはかる《文化の向上》

6. 国民が政治に参加する機会をふやす

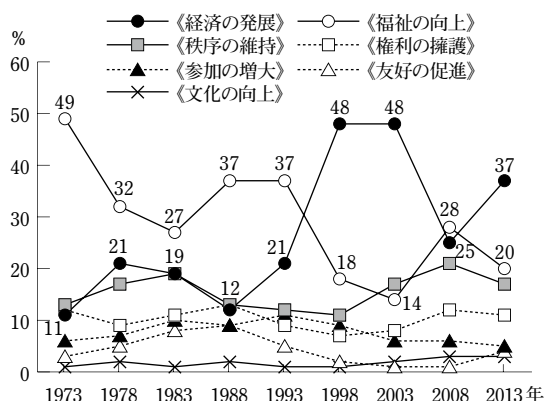
《参加の増大》

7. 外国との友好を深める《友好の促進》

結果は図3に示した通りで、人々が考える政治の重要課題は時代によって大きく変化している。今回は《経済の発展》が《福祉の向上》を逆転し、37%で最多となった。

40年間を通してみると、どの時代にも《経済の発展》と《福祉の向上》のどちらかが最も多く、この2つを合わせると全体のおよそ半数から3分の2を占めている。73年から78年にかけては《福祉の向上》を挙げる人が大きく減少したが、それでも93年までは最も多かった。《経済の発展》はバブル経済崩壊後の93年に増加し、98年には48%に急増して最も多くなった。08年には《福祉の向上》が最多となったが、今回、再び《経済の発展》が上回った。3番目に多い《秩序の維持》は2000年代に入って増加していたが、今回は17%に減少した。

図3 政治課題〈全体〉



これまでの結果をみると、不況の時期には《経済の発展》を望む人が増える傾向があり、第1次オイルショックの後の78年や、バブル崩壊後の90年代に増加している。08年は「いざなぎ景気」の時期で《経済の発展》は減少したが、08年調査の後にはリーマンショックが起き、世界的な金融危機が発生した。また、09年4月から12年4月までは好景気の時期とされるが、実際にはデフレが続く、実感に乏しい景気拡大だったと言われている。今回も、このような経済状況が《経済の発展》への期待につながったと思われる。

3. 権利についての知識

「生存権」のみが高い認知度

12年の第2次安倍内閣の成立以降、憲法に関する議論が活発になっているが、「日本人の意識」調査では憲法についての知識を問う質問もある。具体的には、憲法によって、義務ではなく国民の権利とされていると思うものを、以下の6つの選択肢の中からいくつでも選んでいる。

ア. 思っていることを世間に発表する

《表現の自由》

イ. 税金を納める《納税の義務》

ウ. 目上の人に従う《目上に従順》

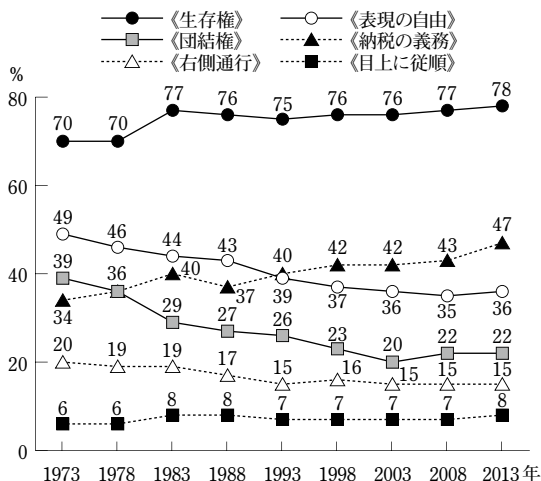
エ. 道路の右側を歩く《右側通行》

オ. 人間らしい暮らしをする《生存権》

カ. 労働組合をつくる《団結権》

6つの中で正しい答え、すなわち実際に憲法で定められている権利は《表現の自由》、《生存権》、《団結権》の3つである。この3つの回答の割合は03年以降変化していない(図4)。なお、《 》の略称は調査相手に見せる回答項目リストには表示していない。

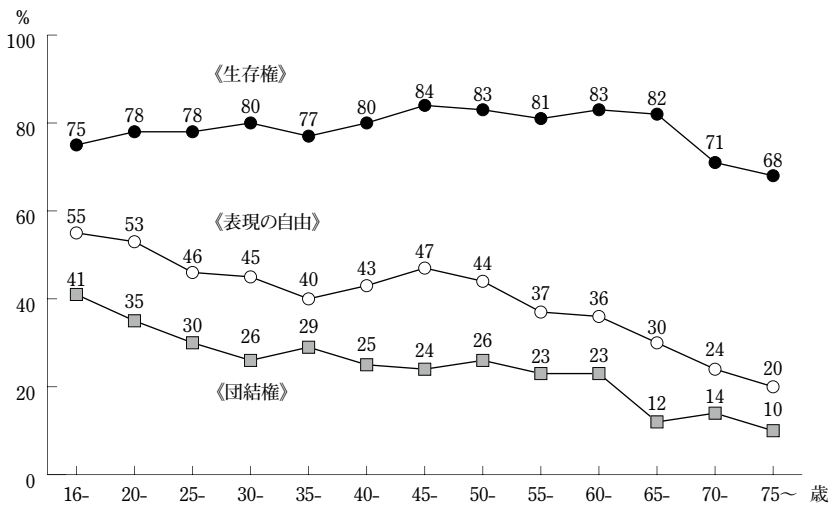
図4 権利についての知識〈複数回答、全体〉



最も認知度が高いのは《生存権》で、83年以降は80%近くが正しく回答している。一方、《表現の自由》は73年の時点でも知っている人が49%と半数にとどまっていたが、その後徐々に減り、現在は36%になっている。《団結権》はさらに少なく、73年の39%から現在では22%へと減少している。反対に、《納税の義務》を権利と回答した人の割合は、40年間で34%から47%に増加した。

今回の結果を年層別にみると、《生存権》は

図5 権利についての知識〈複数回答、2013年の結果、年層別〉



70歳以上でやや少ないものの、ほとんどの層で80%前後となっており、国民の間に広く浸透していると言える。《表現の自由》と《団結権》は同じような傾向で、若い人ほど知っている人が多く、高年層になるに従って少なくなる（図5）。

この質問で正しい答え3つすべてを選び、それ以外は選ばなかった人の割合は73年の時点でも18%だったが、徐々に減少して98年には11%になった。それ以降は常に10%前後であり、13年の結果でも10%と、権利についての知識は低い状態が続いている。

4. 政党支持

自民党支持が30%台に回復

政党支持率は、この5年間で自民党が26%から34%に増加した。それに対し、自民党以外の政党の合計は23%から14%に減少し、03年と並んでこれまでで最も低くなった。その結果、自民党と自民党以外の政党との差が大きく開いた。特に民主党は15%から5%へと3分の1に減少した。また08年に初めて減少した支持なし層は、今回47%で増加も減少もして

いない（図6）。

過去に自民党の支持率が30%を超えていたのは、55年体制が続いていた80年代までであり、それ以降は20%台で推移していたが、今回、25年ぶりに30%台に回復したことになる。

年層別に08年と13年を比べると、自民党は20代前半、30代、40代後半、50代前半と、

若年層・中年層で増加した。一方、自民党以外は、30代～60代および75歳以上の幅広い層で減少している（図7）。08年の結果では、70歳以上では自民党支持が多く、20代前半では自民党以外の政党が多かったが、それ以外の年層では両者に差がなかった。しかし今回は、10代後半と20代後半を除く全年層で自民党が自民党以外を上回っており、年層にかかわらず自民党の強さが目立つ結果となっている。

なお、冒頭で触れたようにこの5年間には2度の政権交代があったため、短期的にみた

図6 支持政党〈全体〉

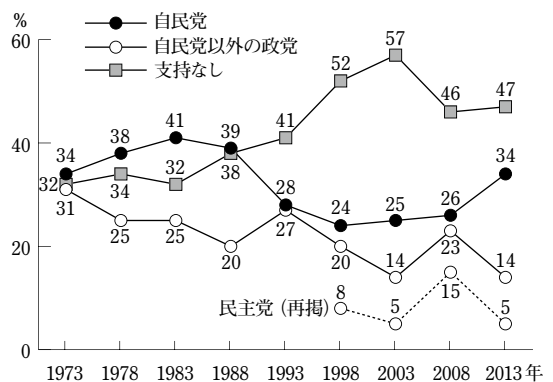
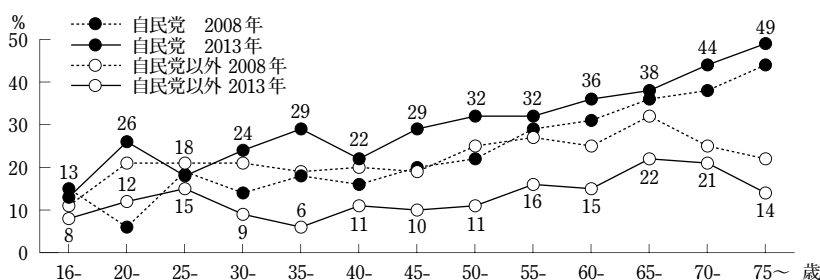


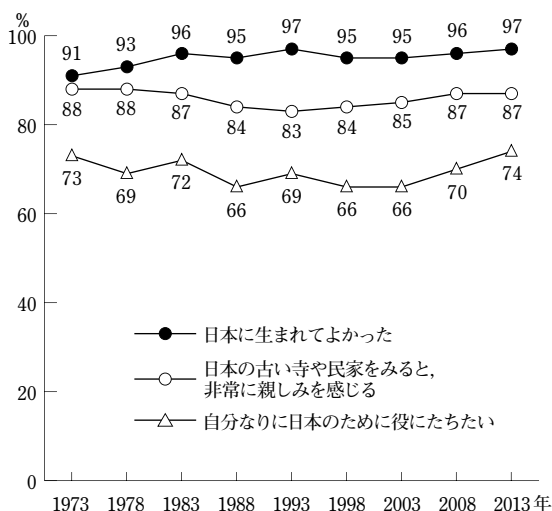
図7 支持政党「自民党」「自民党以外の政党」〈年層別〉



場合には政党支持率もそのつど変化している。NHKが電話法(RDD)で毎月行っている「政治意識月例調査」の結果から政党支持率の動きをみると、民主党への政権交代があった09年8月の衆院選後には自民党の支持率が減少して自民党以外が増加したが、11年に入ると自民党以外は減少し、代わって支持なしが増加した。さらに自民党が政権に復帰した12年末には支持なしが減少して自民党が増加している^{注)}。

常には90%以上、「日本の古い寺や民家をみると、非常に親しみを感ずる」は常に80%以上と非常に高い水準にある。これらは社会や経済の状況が変わっても、多くの人に共有されている意識と言える。「自分なりに日本のために役にたちたい」はこの2つに比べると低く、やや増減もしているが、それでも70%前後を常に維持している(図8)。

図8 日本に対する愛着心〈全体〉



Ⅱ ナショナリズム・宗教

1. 日本に対する愛着と自信

どの時代も高い日本への愛着

調査では、日本に対する感情や誇りなどに関して6項目の質問を設け、「日本に対する愛着心」と「日本に対する自信」の2つの側面から、意識を調べている。

「日本に対する愛着心」として設定したのは以下の3項目で、それぞれについて「そう思う」か「そうは思わない」かを尋ねている。

- ① 日本に生まれてよかった
- ② 日本の古い寺や民家をみると、非常に親しみを感ずる
- ③ 自分なりに日本のために役にたちたい

「そう思う」と答えた人の割合は40年間で大きな変化はない。「日本に生まれてよかった」は

過去最高の水準になった日本への自信

一方、「日本に対する自信」は時代によってかなり変化している。質問は以下の3項目で、愛着心と同様に「そう思う」か「そうは思わない」かを尋ねている。

- ① 日本人は、他の国民に比べて、きわめてすぐれた素質をもっている
- ② 日本は一流国だ
- ③ 今でも日本は、外国から見習うべきことが多い

図9 日本に対する自信(全体)

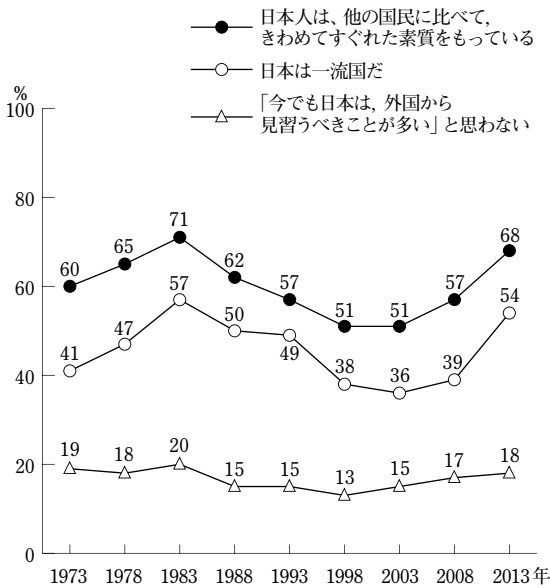
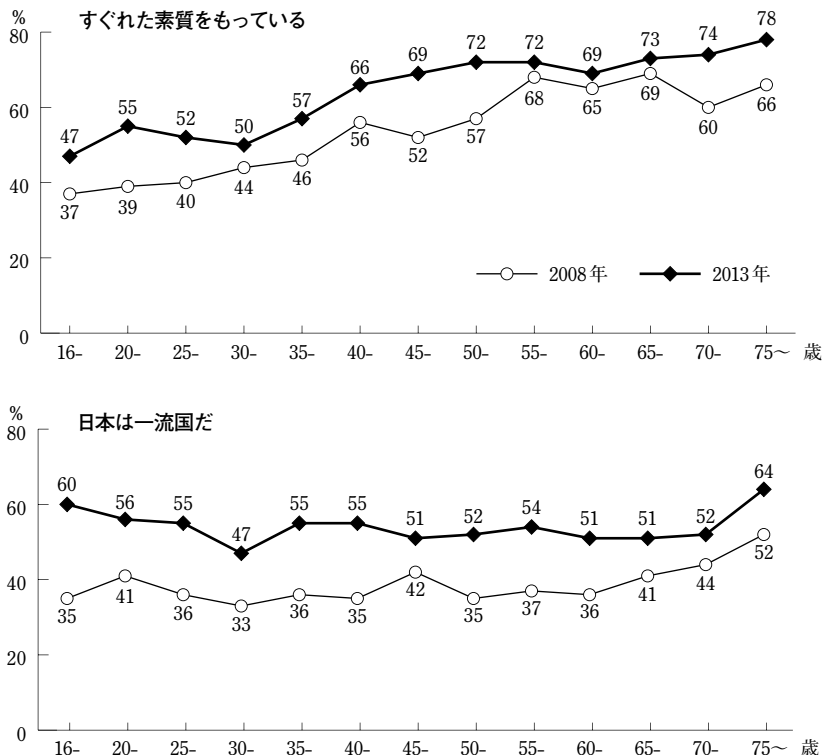


図9にその結果を示した。このうち③の「今でも日本は、外国から見習うべきことが多い」については、「そうは思わない」の割合である。どの項目も最も多かったのは83年で、その後は減少傾向が続いていたが、08年にはすべての項目が増加した。今回は「今でも日本は、外国から見習うべきことが多い」と思わない人については変化がなかったものの、「すぐれた素質をもっている」と「日本は一流国だ」の2つがさらに増加し、これまでで最高だった83年の水準にほぼ並んだ。

「すぐれた素質をもっている」と「日本は一流国だ」について、年層別の結果を5年前の08年と比較したものが図10である。「すぐれた素質をもっている」は20代、30代後半～50代

図10 日本に対する自信(すぐれた素質をもっている、日本は一流国だ)(年層別)



2. 天皇に対する感情

「尊敬」が増加し

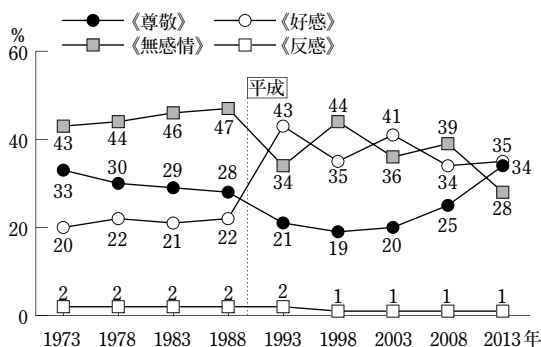
「好感」と並ぶ

天皇に対してどのように感じているかを尋ねた質問では、この5年間で「尊敬の念をもっている」という人が増加した。選択肢は次の4つである。

1. 尊敬の念をもっている《尊敬》
2. 好感をもっている《好感》
3. 特に何とも感じていない《無感情》
4. 反感をもっている《反感》

図11は40年間の推移である。図の左半分、昭和の時代には《無感情》が常に多数で40%を超えていた。次いで《尊敬》,《好感》,《反感》という順番も変わらず、割合にも大きな増減はなかった。昭和の時代は、天皇に対する感情は比較的安定していたと言える。

図11 天皇に対する感情〈全体〉

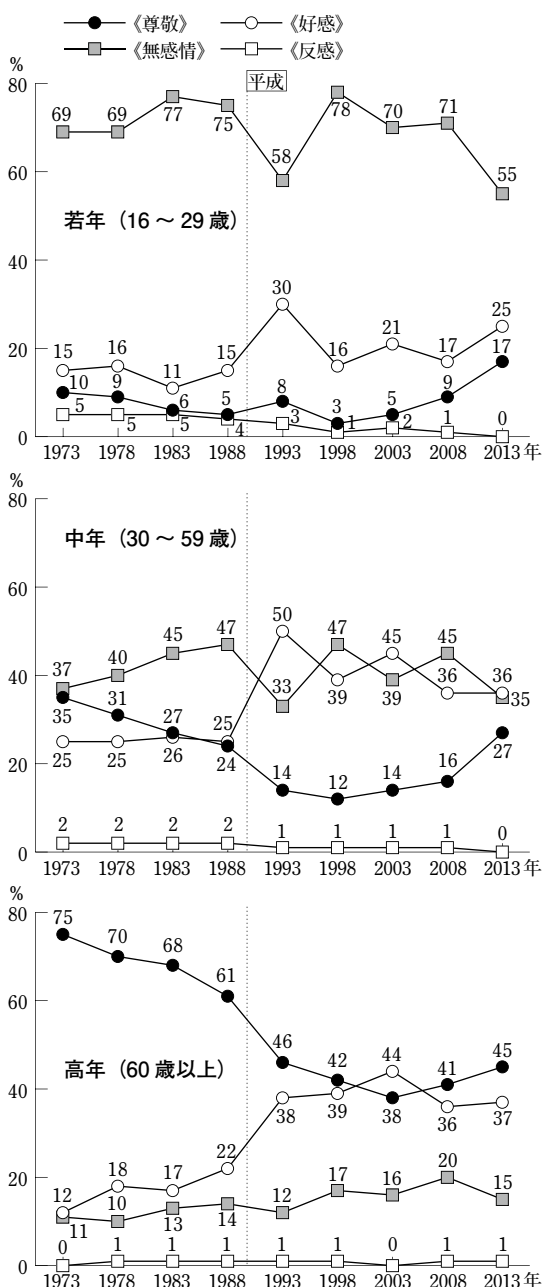


ところが時代が平成に移ると、それまで20%程度だった《好感》が倍増し、《無感情》や《尊敬》を上回って最も多くなった。それ以降は、調査のたびに《好感》と《無感情》が交互にトップとなっている。一方、《尊敬》は平成に入って減少し、20%前後で推移していたが、08年に25%に増えた。今回も増加して34%となり、《好感》の35%と並んだ。これは平成になってからでは最多であり、73年の33%と同じ水準である。反対に《無感情》は今回28%に減少し、これまでで最も少なくなった。

図12は若年(16～29歳)、中年(30～59歳)、高年(60歳以上)の3つの年層に分けた

結果である。若年層ではこの5年間に《好感》と《尊敬》が増加し、特に《尊敬》は17%とこれまでで最多となった。とはいえ、若年層は《無感情》が常に過半数を占めていて、2番目

図12 天皇に対する感情〈年層別〉



に多い《好感》を大きく引き離している。中年層は全体の結果に近い動きをしており、昭和の時代は《無感情》が最も多く、平成になってからは《好感》と《無感情》が入れ替わりながらトップとなっている。高年層は《尊敬》が多数を占めていたが、平成に入ってから《尊敬》と《好感》が接近している。

今回、若年層、中年層、高年層のすべてで《尊敬》が増加したが、割合としては高年層で《尊敬》がいちばん多く、次に中年層、若年層の順番である点はこれまでと変わっていない。

どの世代でも増えた《尊敬》

《尊敬》について、生まれ年を基準にしたグラフを作成すると、図13のようになる。03年までは線がほぼ重なっていて、時代が昭和から平成に変わった83年から93年にかけても大きくは変化していない。つまり天皇に尊敬の念をもつかどうかは世代によって決まっていたと言える。しかし08年、13年には線が上のほうへ移動していて、同じ世代でも時代の影響によって尊敬の念をもつ人が増えていることが分かる。特にこの5年間で増加が大きく、08

年から13年にかけては、84～88年生まれと、78年以前生まれのすべての世代で《尊敬》が増加した。

3. 信仰・信心

行動面では墓参りが増加

宗教については、行動の側面と、信じているものの側面から質問をしている。行動面では《していない》も含めた8つの選択肢から、行っているものをいくつでも選んでもらった。

ア.ふだんから、礼拝、お勤め、修行、布教など宗教的なおこないをしている

《礼拝・布教》

イ.おりにふれ、お祈りやお勤めをしている

《お祈り》

ウ.年に1、2回程度は墓参りをしている

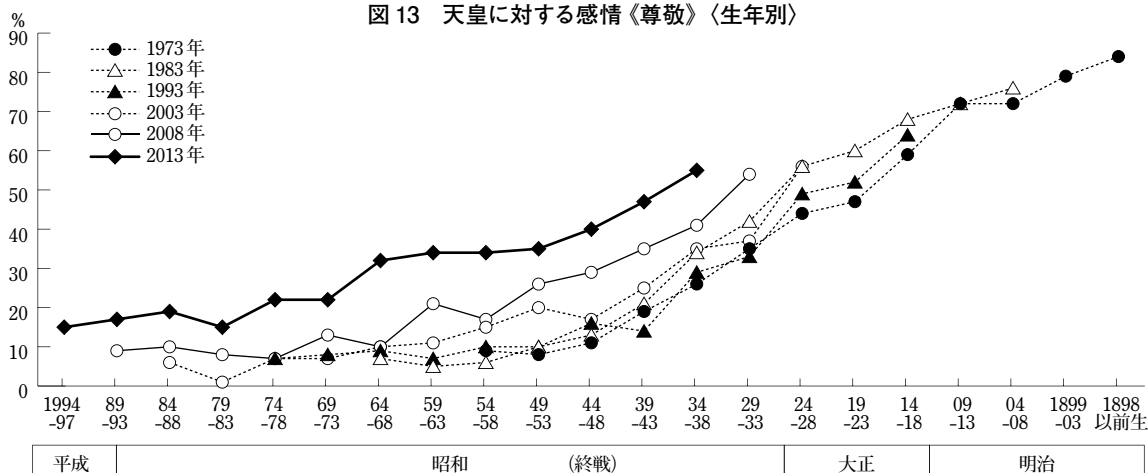
《墓参り》

エ.聖書・経典など宗教関係の本を、おりにふれ読んでいる《聖書・経典》

オ.この1、2年の間に、身の安全や商売繁盛、入試合格などを、祈願しにいったことがある《祈願》

カ.お守りやおふだなど、魔よけや縁起ものを

図13 天皇に対する感情《尊敬》〈生年別〉



自分の身のまわりにおいている

《お守り・おふだ》

キ.この1, 2年の間に, おみくじを引いたり,
易や占いをしてもらったことがある

《おみくじ・占い》

ク.宗教とか信仰とかに関係していると思われ
ることがらは, 何もおこなっていない

《していない》

《墓参り》は調査開始当初から60%を超えて最も多く, 今回さらに増加して72%となった。それ以外の行動はこの5年間で増減はない(図14)。

《墓参り》以外では, 《お守り・おふだ》, 《祈願》, 《おみくじ・占い》といった現世利益的な

行動も30%前後と比較的多く行われている。40年間を通してみた場合, この3つと《墓参り》は行っている人が増加している。一方, 《お祈り》, 《礼拝・布教》, 《聖書・経典》といった行動は減少している。

次に, 宗教に関係することで信じているものについても, いくつでも挙げてもらっている。選択肢は以下の8つである。

ア. 神《神》

イ. 仏《仏》

ウ. 聖書や経典などの教え《聖書・経典の教え》

エ. あの世界, 来世《あの世界》

オ. 奇跡《奇跡》

カ. お守りやおふだなどの力

《お守り・おふだの力》

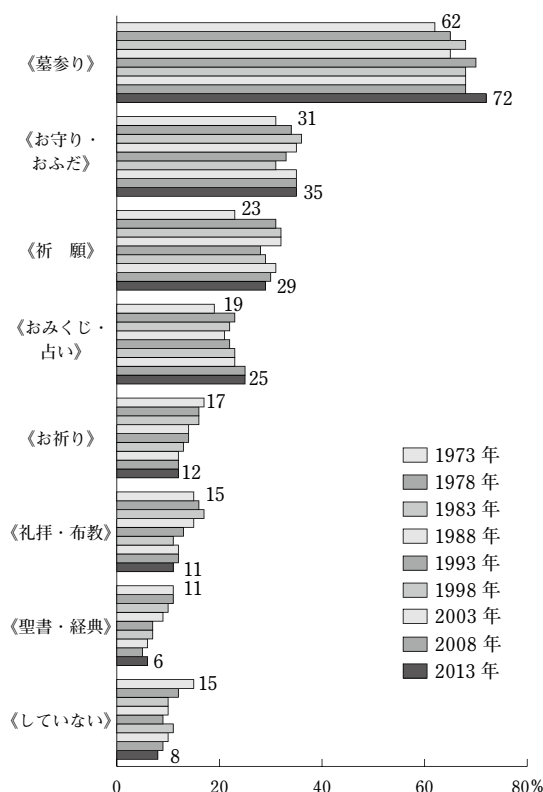
キ. 易や占い《易・占い》

ク. 宗教とか信仰とかに関係していると思われる

ことがらは, 何も信じていない

《信じていない》

図14 宗教的行動(複数回答, 全体)

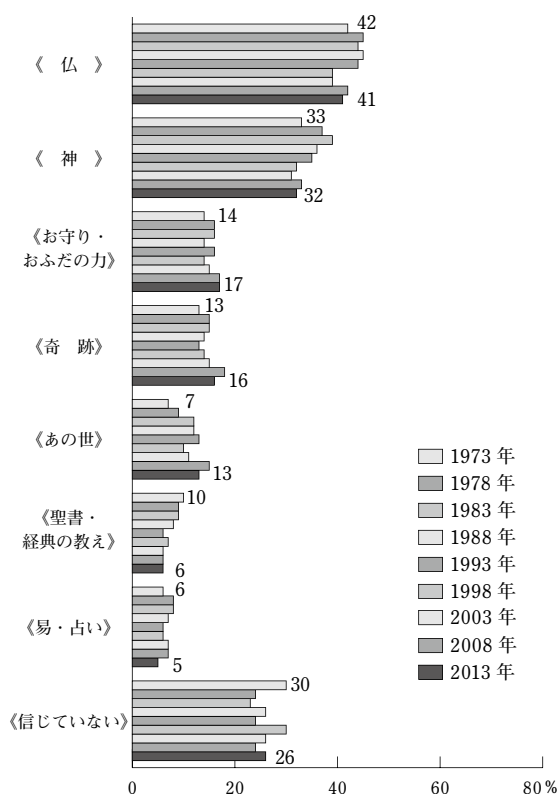


宗教に関係することで信じているものでは, いずれも半数に届かないものの《仏》と《神》の2つがどの時代にも他を引き離して多い。この5年間では《易・占い》が減り, 《信じていない》が増加したのみで, それ以外は変化がない(図15)。

《お守り・おふだの力》, 《奇跡》, 《あの世界》は, 今回の結果でも10%台でそれほど多くないが, いずれも40年前に比べると増加しており, 特に若年層, 中年層で増えている。

なお, 93年から98年にかけて《仏》, 《神》, 《お守り・おふだの力》, 《あの世界》が減少し, 《信じていない》が増加している。これは95年に発生した地下鉄サリン事件など, オウム真理教による一連の事件の影響と考えられる。

図 15 信仰・信心〈複数回答，全体〉



以上のように，宗教に関しては行動面，信じているものとも，この5年間で大きな変化はみられない。

Ⅲ 基本的価値観

1. 人間関係

密着した関係を望む人が減少

人間関係について，「隣近所」，「職場」，「親せき」の3つの場で，どの程度深いつきあいが望ましいと考えているのかを，それぞれ下記の3つの選択肢の中から1つ選んでもらっている。

○「隣近所」

1. 会ったときに，あいさつする程度のつきあい
《形式的つきあい》

2. あまり堅苦しくなく話し合えるようなつきあい
《部分的つきあい》

3. なにかにつけ相談したり，たすけ合えるようなつきあい
《全面的つきあい》

○「職場」

1. 仕事に直接関係する範囲のつきあい
《形式的つきあい》

2. 仕事が終わってからも，話し合ったり遊んだりするつきあい
《部分的つきあい》

3. なにかにつけ相談したり，たすけ合えるようなつきあい
《全面的つきあい》

○「親せき」

1. 一応の礼儀を尽くす程度のつきあい
《形式的つきあい》

2. 気軽に行き来できるようなつきあい
《部分的つきあい》

3. なにかにつけ相談したり，たすけ合えるようなつきあい
《全面的つきあい》

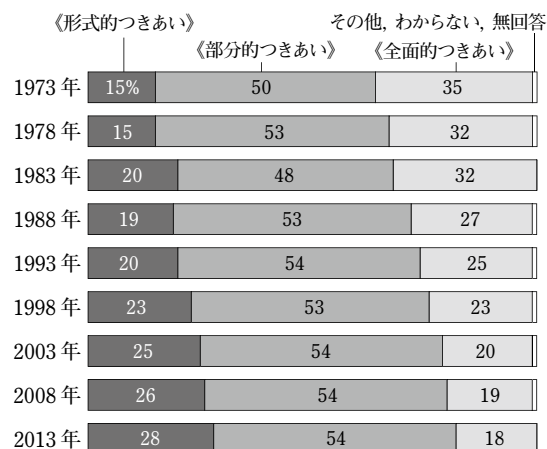
03年までは，3つの場とも密着した関係の《全面的つきあい》が望ましいという人が減り，あっさりとした《形式的つきあい》が望ましいという人が増えていた。また，ほどほどのつきあいである《部分的つきあい》を望む人は，「親せき」については1回，「職場」と「隣近所」についてはそれぞれ2回増え，「隣近所」だけが1回減少した（図16）。

以上のように，03年までは3つの場で変化の方向はほぼ一致していたが，それ以降は様相が異なる。

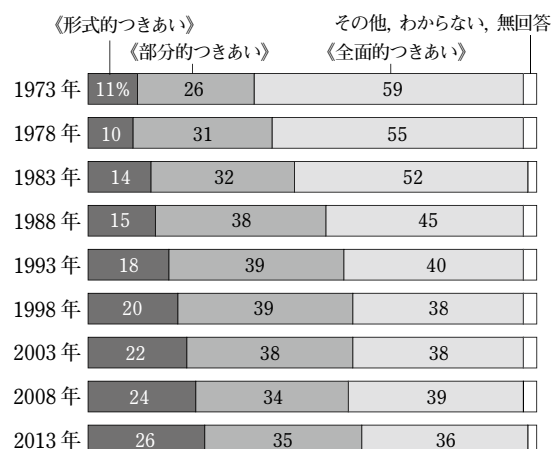
まず，「隣近所」について，03年以降の結果をみると，5年ごとには3つの考えとも割合は変わっていない。一方，「職場」については，08年には《形式的つきあい》が増えて，《部分的つきあい》が減り，13年には《全面的つきあい》

図 16 人間関係〈全体〉

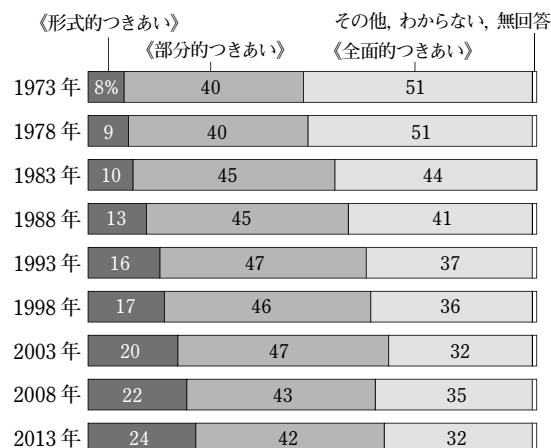
「隣近所」



「職場」



「親せき」

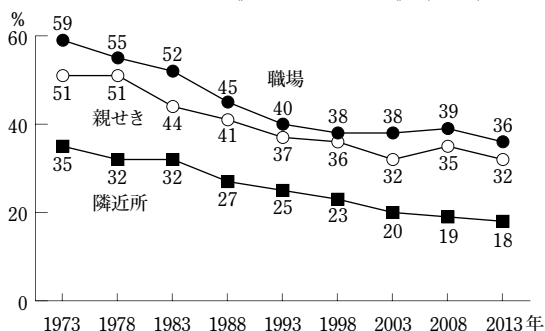


が減った。「親せき」については、08年には《部分的つきあい》が減り、《全面的つきあい》が初めて増えた。しかし、13年には《全面的つきあい》は再び減り、《形式的つきあい》が増えた。

このように、人間関係に対する考えは、03年以降はそれぞれの場によって異なる様相を示しているが、40年間でみれば、いずれの場でも密着した関係を望む人が大きく減少した点は一致している。

また、《全面的つきあい》を望む人が最も多いのは「職場」であり、次いで「親せき」、「隣近所」という順番は40年間変わらない(図17)。

図 17 人間関係《全面的つきあい》〈全体〉



世代で決まっている

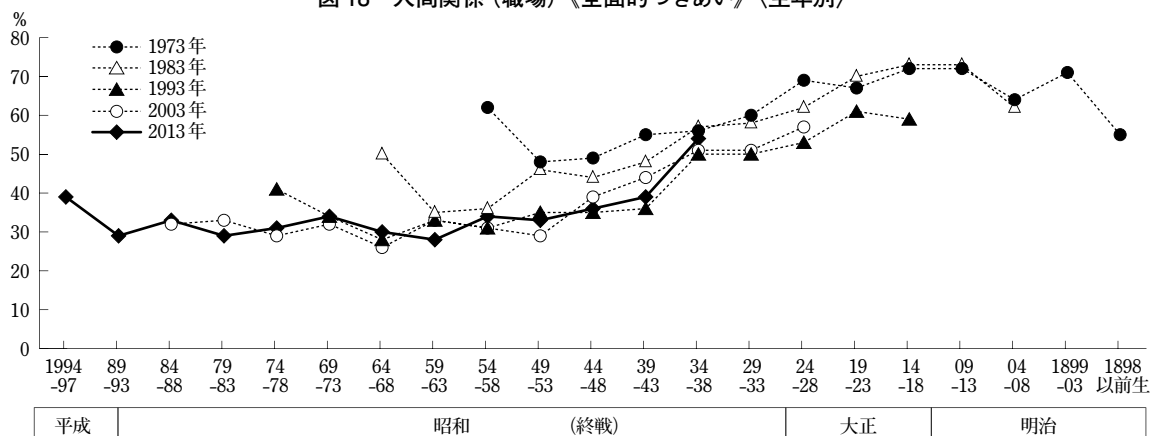
「職場」、「隣近所」の人間関係の考え

人間関係についての考えは、世代によって基本的には決まっている。

図18は、「職場」において《全面的つきあい》が望ましいという人を、生年別に示したものである。なお、見やすくするために、グラフには10年ごとの結果を表示した。

まず、73年と83年の線についてみると、2本の線はほとんど重なっている。これは、生年別にみれば、10年経っても人々は意見を変えなかったことを意味している。そして、グラフの右のほうの明治生まれの人では多く、左の昭和

図18 人間関係(職場)《全面的つきあい》〈生年別〉



生まれでは少ない。「職場」において《全面的つきあい》が望ましいと考える人は、世代によって決まっているのである。

《形式的つきあい》と《部分的つきあい》も同様で、明治生まれでは少なく、昭和生まれで多いという点は《全面的つきあい》と異なるが、望ましいと考える人の割合は世代ごとにみれば変わらない。このように、「職場」における人間関係についての考えは世代によって決まっている。

なお、図18で73年と83年、93年の線は、それぞれ左端がその後の線と大きくずれている。各線の左端は調査時には16～19歳であり、20代になって《全面的つきあい》が望ましいと考える人が減ったために、ずれたのである。その後は、時代が変わっても重なっている。このことから、20代になって社会に出たことによって、考えを変えるという加齢の影響が現れていると言える。

73年と83年の10代以外を比較すると、線はほとんど重なっている。これらの世代では《全面的つきあい》が望ましいと考える人の割合が変わらなかったことを示している。にもかかわらず、国民全体では59%から52%へと減少した要因は、世代交代である。《全面的つきあい》

が望ましいという人は明治生まれで多く、昭和生まれでは少ない。73年から83年の間に、《全面的つきあい》が望ましいという人が多い明治生まれが亡くなり、その一方で、《全面的つきあい》が望ましいという人が少ない世代が新たに加わった結果、国民全体では《全面的つきあい》が望ましいという人が減少したのである。

なお、図は示さなかったが、「隣近所」の人間関係についての考えも、基本的に世代で決まっている。

親せきは世代間の差が縮小

次に、「親せき」についてみていく。ただし、98年までとそれ以降では傾向が異なるので、分けてみていく。

図19は、図18と同じように、「親せき」について《全面的つきあい》が望ましいという人を、生年別に98年まで示したものである。ただし、こちらはより詳細にみていくため、5年ごとの結果を示した。

戦前生まれの人では、線がほぼ平行に下にずれている。したがって、時代の推移とともに、《全面的つきあい》が望ましいという人が徐々に意見を変え、減ったと考えられる。

図 19 人間関係(親せき)《全面的つきあい》〈生年別〉1998 年調査まで

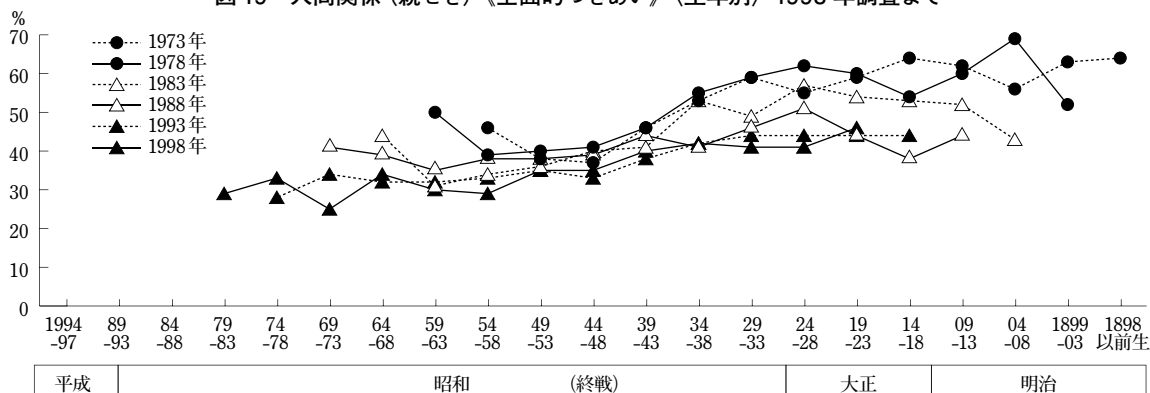


図18の「職場」についても、線は下にずれていた。しかし、「親せき」のほうがずれがやや大きい。つまり、時代の影響により意見を変えた人が、各世代で「職場」より少し多かったのである。

また、各線の傾きは「職場」のほうが大きく、世代間での差が大きい。そのため、世代交代による変化は「職場」のほうが大きくなる。その結果、ともに時代の影響と世代交代の影響があったが、国民全体での減少は「職場」のほうがやや多かったのである。

次に98年以降をみていく(図20)。

いずれの線も左端と右端との差がほとんどなくなっているのに、世代間の差が小さくなったことが分かる。そのため、98年以降は世代

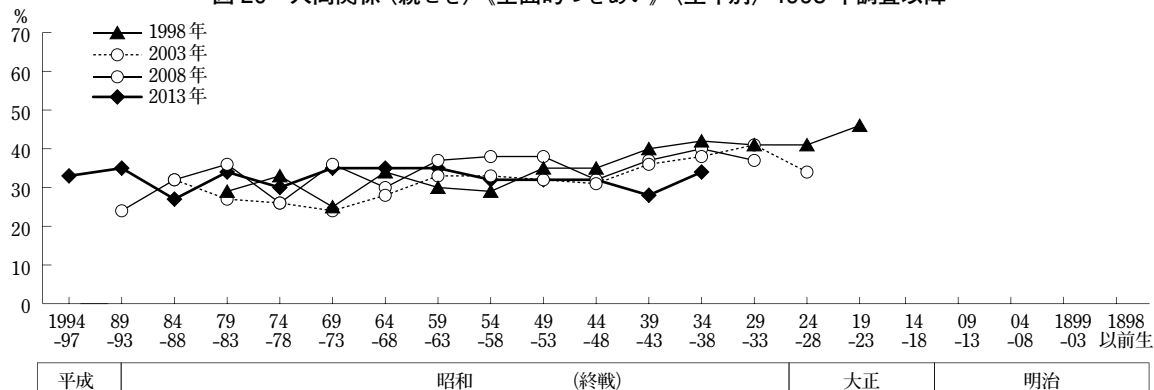
交代による変化はほとんどなくなったと言える。したがって、国民全体での98年からの変化は、主に時代の影響によるものである。

98年以降も「職場」と「隣近所」については、《全面的つきあい》が望ましいという人が増えることがなかったのに対し、「親せき」については08年に増え、13年には減ったのは、その時々々の社会状況の影響で考えを変える人がいて、その動向がそのまま国民全体の結果に反映するようになったためである。

場によって異なるつきあいの深さ

次に、同じ人が3つの場とも同じ程度のつきあいの深さを望ましいと考えているのか、それとも、場によって望ましいと考えるつきあいの

図 20 人間関係(親せき)《全面的つきあい》〈生年別〉1998 年調査以降



程度が異なるのかをみていく。

「なにかにつけ相談したり，たすけ合えるようなつきあい」という《全面的つきあい》が望ましいと回答した場合には「+」，それ以外を回答した場合には「-」とした。そして3つの場すべてで《全面的つきあい》が望ましいと回答した人は，「親せき」，「職場」，「隣近所」の順に「+++」と，「親せき」だけに《全面的つきあい》が望ましいと回答した人は「+-+」などと区分した。その結果を示したものが図21である。

図21 人間関係パターン〈全体〉

(+, -は左から「親せき」, 「職場」, 「隣近所」)

	+++	++	+-	+	-	---	----	
1973年	18%	18	5	8	10	16	4	22
1978年	17	17	5	7	12	15	4	24
1983年	15	14	5	8	12	16	5	27
1988年	11	12	5	6	14	15	5	32
1993年	9	10	5	6	13	15	5	37
1998年	8	11	5	5	12	15	5	40
2003年	7	10	4	4	12	17	4	42
2008年	7	11	3	5	14	16	4	40
2013年	6	10	4	4	13	16	4	43

+++ ++ +-+ +- -++ --+ ---

すでに40年前の73年でも，3つの場すべてで《全面的つきあい》が望ましいという人(++)は18%しかいなかった。一方，いずれの場でも《全面的つきあい》が望ましいとは考えない人(---)が22%で，最も多かった。

80年代以降，「+++」の人は徐々に減り，現在ではわずか6%しかいない。一方，「---」の人は43%に上っている。

なお，3つの場とも同じ程度のつきあいが望ましいという人は少ない。3つの場とも《部分的つきあい》が望ましいという人は11%，《形式的つきあい》が望ましいという人は5%で，3つ

の場とも《全面的つきあい》が望ましいという人6%と合わせて，現在では22%しかいない。このように，場によって望ましいと考えるつきあいの深さが異なる人が多い。

2. 能率・情緒

職場で多い情緒志向

「会合の進め方」，「仕事の相手」，「旅行のしかた」の3つの場について，ものごとを進める際に，能率と情緒のどちらを優先するかについて尋ねている。用意した選択肢はそれぞれ下記であり，どちらか一方を選んでもらっている。

○「会合の進め方」

甲：世間話などをまじえながら，時間がかかってもなごやかに話をすすめる《情緒》

乙：むだな話を抜きにして，てきぱきと手ぎわよくみんなの意見をまとめる《能率》

○「仕事の相手」

甲：多少つきあいにくいだが，能力のすぐれた人《能率》

乙：多少能力は劣るが，人柄のよい人《情緒》

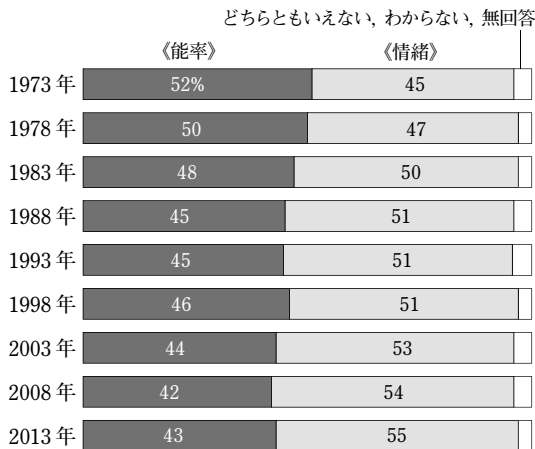
○「旅行のしかた」

甲：最大限に旅行を楽しめるように，あらかじめ計画を十分に練って旅行する《能率》

乙：行く先々での気分やまわりの様子に応じて，気の向くままに旅行する《情緒》

3つの場とも40年間であまり大きな変化はない。その中では最も変化した「会合の進め方」について，まずみていく。地域に起きた問題を話し合うために隣近所の人が集まった際の会合の進め方として，「むだな話を抜きにして，てきぱきと手ぎわよくみんなの意見をまとめる《能率》」ほうがよいという人は，73年には52%で，「世間話などをまじえながら，時間がかかって

図 22 能率・情緒（会合）〈全体〉



もなごやかに話をすすめる《情緒》」ほうがよいという人の45%を上回っていた（図22）。

しかし、83年には《情緒》志向の人が50%に増え、88年と03年には《能率》志向の人が減った。変化したのはこの3回しかないが、40年間では多数が逆転し、今回も《情緒》志向の人が55%で、《能率》志向の43%より多い。

続いて、「旅行のしかた」についてみていく。73年には「最大限に旅行を楽しめるように、あらかじめ計画を十分に練って旅行する《能率》」ほうがよいという人が61%で、「行く先々での気分やまわりの様子に応じて、気の向くままに旅行する《情緒》」の35%よりかなり多かった（図23）。

《能率》志向の人は78年に増え、83年には減ったが、その後は変化がなく、現在は59%で、73年より少し減った。一方、《情緒》志向の人は83年と98年に増えたが、現在は39%で、73年よりは少し多い程度であり、40年前と比較してもあまり変化していない。

最後に、「仕事の相手」についてみていく。「旅行のしかた」とは反対に、「多少つきあいにくいが、能力のすぐれた人」を選ぶという《能率》志向の人は少なく、73年は27%だった。一方、

図 23 能率・情緒（旅行）〈全体〉

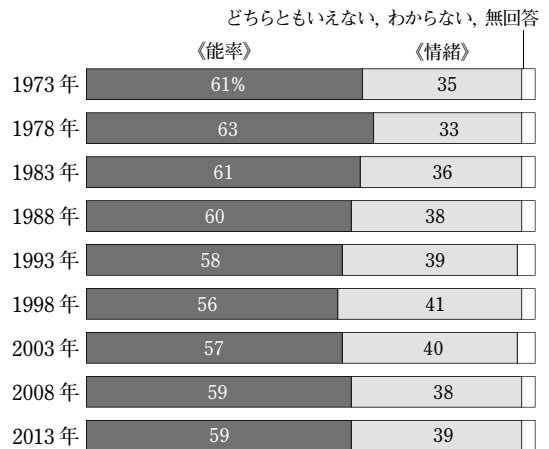
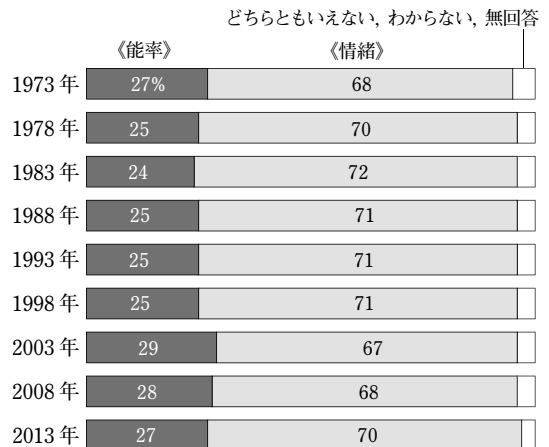


図 24 能率・情緒（仕事の相手）〈全体〉

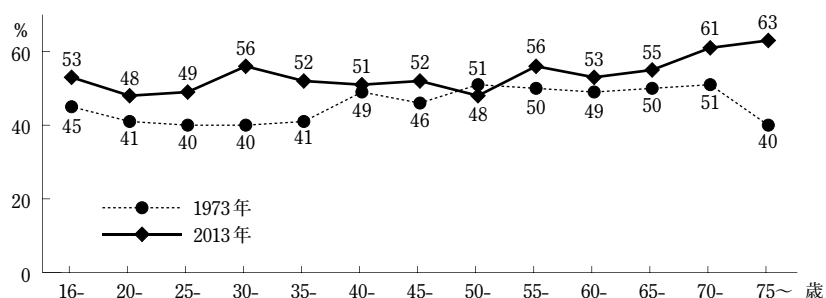


「多少能力は劣るが、人柄のよい人」を選ぶという《情緒》志向の人が68%と多かった（図24）。

《能率》志向の人は03年に増えたが、現在は27%で、73年と変わらない。一方、《情緒》志向の人は78年に70%に増え、03年に67%へ減った以外は変化がない。現在は70%で、73年から2%だけ増えた。3つの場の中では、「仕事の相手」に対する考えが、40年間で最も変わっていない。

以上のように、能率を優先するか、それとも情緒を優先するかについての人々の考えは、

図 25 能率・情緒(会合)《情緒》〈年層別〉



大きくは変わっていない。その中で、唯一多数が逆転した「会合の進め方」について、《情緒》志向で40年間の変化を年層別にみている(図25)。

30代と70歳以上だけで増え、その他の層では減少していないものの増えてもいない。そのため、国民全体での増加も10%と、それほど大きくなかったが、《能率》志向との差が73年は小さかったので、現在は《情緒》志向が多数となったのである。

変わらない逆転した関係

以上のように、3つの場とも40年間では《情緒》志向が増えたが、「仕事の相手」と「旅行のしかた」では増加は少なく、「会合の進め方」でも10%の増加にとどまる。このように、場

によって変化の様子は多少異なるが、《情緒》志向の人は「旅行のしかた」で少なく、「仕事の相手」で多いという関係は40年間続いている(図26)。

最も効率性・合理性

が求められるはずの仕事の場で《情緒》志向の人が多く、本来、情緒的な価値が求められる旅行については《能率》志向の人が多いという逆転した関係が、40年の間変わっていない。

3. 生活目標

身近な人たちと、なごやかな毎を送りたい

「あなたの生活目標は?」といきなり聞かれても戸惑う人が多いかもしれない。しかし、明確に意識しているかいないかは別にして、何らかの目標があるはずである。

調査では、人々の生活目標を把握するために、2つの基本軸を設定した。その1つは現在の生活に焦点を当てているのか、それとも未来の生活に焦点を当てているのか、という現在中心⇔未来中心の軸である。もう1つは、自己の生活に力点を置いているのか、それとも他者ないし社会との関連に力点を置いているのか、という自己本位⇔社会本位の軸である。

そして、その組み合わせからなる下記の4つの選択肢の中から1つを選んでもらっている。

1. その日その日を、自由に楽しく過ごす
《快志向》
2. しっかりと計画をたてて、豊かな生活を築く
《利志向》
3. 身近な人たちと、なごやかな毎を送る
《愛志向》

図 26 能率・情緒《情緒》〈全体〉

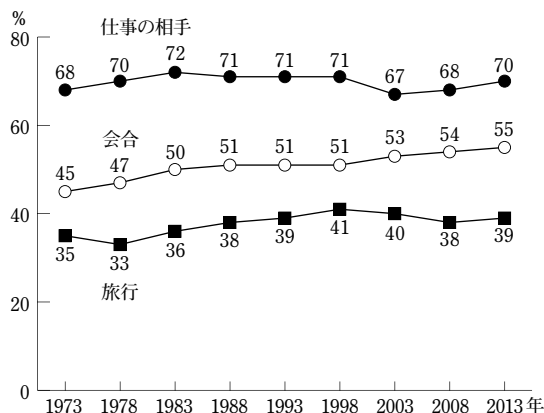
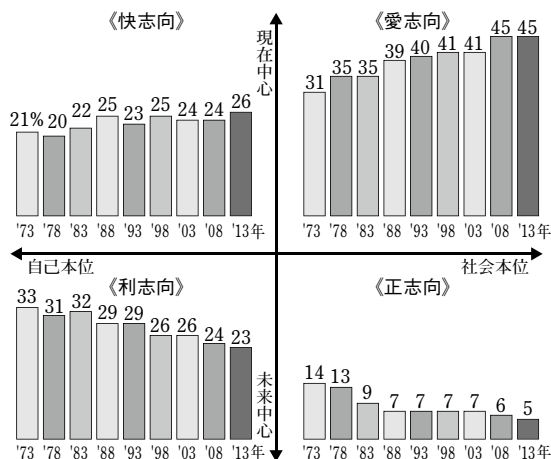


図 27 生活目標〈全体〉



4. みんなと力を合わせて、世の中をよくする

《正志向》

最近の5年間は変化がないが、40年間でみると、現在の生活を重視する《愛志向》と《快志向》の人が増え、未来を重視する《利志向》と《正志向》の人が減った(図27)。

40年間の変化を詳しくみると、73年には《利志向》と《愛志向》の人がほぼ同じ程度であった。次いで《快志向》の人が多く、《正志向》は14%と少なかった。

78年には《愛志向》だけが増え、最も多くなる。その後《快志向》も増えたが、5年ごとの変化をみると、《愛志向》は減ったことがないのに対し、《快志向》は88年から93年にかけて一度だけ減少した。

一方、《正志向》は80年代に減り、《利志向》は88年、98年、08年に減り、ともに増えたことはない。その結果、現在では《愛志向》が最も多い45%を占め、《快志向》が26%で続いている。

次に、年層別の変化を、まず女性についてみていく(表2)。

表には、各回で年層別に最も多く支持されたものを示し、末尾には最新の割合を示した。

73年には24歳以下の若い層と、50代～70代前半までの層では《愛志向》が最も多かった。そして、20代後半から40代後半まででは《利志向》が多く、75歳以上では《快志向》が多かった。

その後、《愛志向》が各年層で増え、今回はすべての年層で《愛志向》が最も多くなった。

女性に比べ男性は年層別に違いがある(表3)。

表 2 生活目標〈最も多いもの、女性年層別〉

	女 性 (歳)													
	16-	20-	25-	30-	35-	40-	45-	50-	55-	60-	65-	70-	75 ~	
1973 年	愛		利					愛					快	
1978 年	愛		利	愛	利			愛					快	
1983 年	愛					利			愛					
1988 年	快	愛					利		愛			快		
1993 年	愛		利	愛			利	愛						
1998 年	快	愛												
2003 年	愛 快	利	愛											
2008 年	快	愛												快
2013 年	愛													
(%)	54	48	55	55	67	63	56	53	55	51	36	41	42	

表 3 生活目標〈最も多いもの、男性年層別〉

	男 性 (歳)													
	16-	20-	25-	30-	35-	40-	45-	50-	55-	60-	65-	70-	75~	
1973 年	愛	快	利							正	愛 正 快			
1978 年	快	愛	利								正	快	愛	
1983 年	快	愛	利	愛	利						快	愛	快	
1988 年	快	愛	利	愛	利		愛	快						
1993 年	快	愛	利	愛	利	愛	利	愛	快	愛	快			
1998 年	愛	快	愛	利	利	愛						快		
2003 年	快	愛	利	愛						利	愛			
2008 年	愛	快	愛								快			
2013 年	快	愛	利	愛							快			
(%)	44	37	39	42	43	44	42	40	49	33	38	36	45	

73年には20代後半～50代前半までは《利志向》が最も多く、10代後半の若い人と60歳以上の高年層では《愛志向》が多かった。また、50代後半と60代後半では、「みんなと力を合わせて、世の中をよくする」という《正志向》の人が最も多かった。

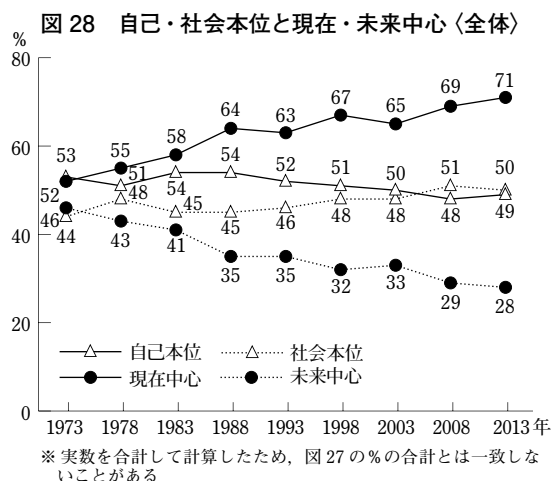
男性でも女性と同じように各年層で《愛志向》が増えたが、現在でも20代後半では《利志向》が多く、10代後半と60歳以上では《快志向》が多い。

以上のように、男女とも現在では《愛志向》の人が多くなっている。特に女性ではすべてのライフステージで《愛志向》が最も多く、30代後半や40代前半では60%を超えている。一方、男性は家族や社会に責任を負う必要がない生徒や学生を中心とした若い人と、社会の第一線を退いた人が多い高年層は「その日その日を、自由に楽しく過ごす」という《快志向》が多く、20代後半では「しっかりと計画をたてて、豊かな生活を築く」という《利志向》の人が多くなど、ライフステージに応じた目標の違いがある。

現在中心が増加

次に、選択肢を作成する際の2つの軸—自己本位⇔社会本位と現在中心⇔未来中心—についてみる。図28では自己本位⇔社会本位を「△」で、現在中心⇔未来中心を「●」で示した。

まず、現在中心⇔未来中心についてみると、73年には《快志向》と《愛志向》を合わせた「現在中心」の人が52%で、《利志向》と《正志向》を合わせた「未来中心」の46%を上回っていた。その後、93年と03年、13年を除いて「現在中心」の人が増え、「未来中心」の人が減った結果、今では「現在中心」の人が71%となり、「未



来中心」の28%よりかなり多い。

一方、「△」で示した自己本位⇔社会本位は、73年には《快志向》と《利志向》を合わせた「自己本位」の人が53%で、《愛志向》と《正志向》を合わせた「社会本位」の44%を上回っていたが、78年には「自己本位」の人が減って、両者の差がなくなった。次の83年には「自己本位」の人が増え、再び差が生じた。その後、5年ごとには変化がなかったが、98年までの15年間でみると、「自己本位」が減って「社会本位」が増え、両者の差が再びなくなった。08年には「自己本位」が減って「社会本位」が増え、数字の上では両者が逆転したが、差があると言えるほどではなく、現在も両者が同程度である。

以上のように、日々の生活において、自己と社会のどちらに重点を置いているのかについては、若干の増減はあったものの、今では両者に差はなく、ほぼ半数ずつに分かれている。一方、現在と未来のどちらに焦点を当てているかでは、未来中心の人は大きく減少し、今では現在の生活を重視する人がかなり多い。その中でも「その日その日を、自由に楽しく過ごす」という人よりも、「身近な人たちと、なごやかな毎日を送る」という人が多いのである。

IV 意識変化の傾向

7月号、8月号の2回にわたり、主な質問や、最近の5年間で変化のあった質問について個別にみてきた。最後に国民全体で意識変化の大きかった時期や領域、選択肢などについて分析し、40年間の意識変化の傾向を探っていきたい。

1. 変化の大きい領域と質問

「日本人の意識」調査の中で、第1回から継続している質問は54問である。選択肢の数にすると、「その他」や「わからない、無回答」、「非該当」を除いて212になる。この212の各選択肢について、5年ごとの変化量、および73年から13年までの40年の変化量の絶対値を求めた。表4に示したのは、質問全体および領域別の変化量の平均値である。

質問全体で変化が大きかったのは73年から78年にかけてと、93年から98年にかけての2.3%である。そのほか、83～88年、88～93年も2%以上だが、98～03年以降は1%台が続いており、2000年代に入って変化のペースはやや鈍っている。

73年から78年にかけては、どの領域もまっぴんなく変化しているが、基本的価値と経済・社会・文化では、この73～78年の変化が全

表5 変化の大きい項目（08年から13年の変化量）

質問		選択肢	08年	13年	08～13年 変化量
第34問B	日本は一流国だ	そう思う	39%	54	15
第34問B	日本は一流国だ	そうは思わない	53	38	-15
第40問	政治課題	《経済の発展》	25	37	12
第34問D	日本人はすぐれた素質をもっている	そう思う	57	68	11
第35問	天皇に対する感情	《無感情》	39	28	-11
第35問	天皇に対する感情	《尊敬》	25	34	9
第34問D	日本人はすぐれた素質をもっている	そうは思わない	34	25	-9
第42問	支持政党	自民党以外	23	14	-9
第12問	家庭と女性の職業	《両立》	48	56	8
第40問	政治課題	《福祉の向上》	28	20	-8

期間を通して最も大きい。93年から98年にかけては、政治と家族・男女関係の領域での変化が大きい。

08年から13年までの最近5年間は、政治の領域で3.0%変化している点が目立つ。そのほか、基本的価値と家族・男女関係が1.6%変化しているが、基本的価値は73年から78年までの2.2%に次ぐ変化の大きさであり、今回、生活満足感が上昇したことが特に影響している。

08年から13年にかけて、大きく変化した選択肢を具体的にみると表5のようになる。「日本は一流国だ」や「日本人は、他の国民に比べて、きわめてすぐれた素質をもっている」といっ

た日本・日本人についての質問、政治課題、天皇に対する感情で変化が大きい。また、家庭と女性の職業についての質問で《両立》が大きく増えている。

一方、先の表4で40年間を通してみると、最も変化の

表4 変化量の平均

質問領域	項目数	73～78年	78～83年	83～88年	88～93年	93～98年	98～03年	03～08年	08～13年	73～13年
全体	212	2.3%	1.9	2.2	2.0	2.3	1.5	1.8	1.9	7.7
基本的価値	55	2.2	1.4	1.5	1.1	1.0	1.1	1.4	1.6	5.6
経済・社会・文化	55	2.2	1.6	2.0	1.6	1.5	1.3	1.3	1.2	6.4
家族・男女関係	37	2.5	1.9	3.0	2.6	2.8	1.5	1.4	1.6	12.8
政治	65	2.5	2.7	2.4	2.8	3.8	1.9	2.9	3.0	7.8

■ 3%以上 ■ 2%以上

※ 第42問支持政党、第43問支持できそうな政党は「政党まとめ」を使用
1番目、2番目を尋ねる質問は、1番目と2番目を合計した結果を使用
関連質問は、全体分母を使用

大きい領域は家族・男女関係であり、選択肢単位の変化の平均は12.8%である。ただし全体と同じように、2000年代に入ってから変化量が小さくなっている。政治は5年ごとにみた場合には家族・男女関係を上回る変化をしているが、40年間では7.8%の変化となっている。これは家族・男女関係では一方向に変化し続けている質問が多いのに対し、政治は、政治課題の《経済の発展》や《福祉の向上》、政党支持の自民党以外など、同じ選択肢が増えたり減ったりして必ずしも一方向の変化になっていないためである。

40年前と比較して変化が大きい選択肢を表6に挙げた。最も大きく変化したのは婚前交渉の《不可》で、58%から21%へ、37%減少している。次に大きいのは夫が家事手伝いを《するのは当然》で、こちらは53%から89%に増加した。以下、家庭と女性の職業の《両立》、女子の教育の「大学まで」と「高校まで」など、家族・男女関係の領域に変化量の大きいものが多く、上位10項目のうち8つを占めている。

表6 変化の大きい項目(73年から13年の変化量)

質問	選択肢	73年	13年	73～13年変化量
第29問 婚前交渉について	《不可》	58%	21	-37
第13問 夫の家事手伝い	《するのは当然》	53	89	36
第12問 家庭と女性の職業	《両立》	20	56	36
第25問 女子の教育	大学まで	22	57	35
第25問 女子の教育	高校まで	42	12	-30
第13問 夫の家事手伝い	《すべきでない》	38	8	-30
第40問 政治課題	《福祉の向上》	49	20	-29
第3問C 地域の環境に満足	そう思う	60	87	27
第29問 婚前交渉について	《愛情で可》	19	46	27
第8問 理想の家庭	《家庭内協力》	21	48	27

■ 40年間の最大値 □ 40年間の最小値

表7 変化の小さい項目(40年間の最大値・最小値の差)

	質問	選択肢	最大値	最小値	最大と最小の差
第41問	政治活動のあり方	《静観》	73年 63%	08年 59%	4%
第4問	生活全体についての満足感	《やや満足》	88, 93年 61	73年 57	4
第30問	年上の人に対することばづかい	敬語が当然	83年 89	73年 84	5
第10問	結婚式の仲人	2人をよく知る人	08年 87	88年 82	5
第7問E	生活充実手段(健康な体)	第1位	73年 78	03年 73	5
第16問	能率・情緒(仕事の相手)	《情緒》	83年 72	03年 67	5
第34問C	日本の古い寺や民家に親しみを感じる	そう思う	78年 88	93年 83	5
第3問D	人間関係に満足	そう思う	93年 72	73年 66	6
第34問A	日本に生まれてよかった	そう思う	13年 97	73年 91	6
第23問	能率・情緒(旅行)	《能率》	78年 63	98年 56	7

また多くの項目では、73年と13年のどちらかが最小値で、もう一方が最大値となっている。

一方で、40年間であまり変化のない意識もある。表7は常に50%を超える回答があった選択肢、つまり多くの人に共有されている意識で、最大値と最小値の差が小さいものである。これらは社会が変化しても多数派の意識であり続けており、その割合もほとんど変化していない。そして、日本に生まれてよかった、年上の人には敬語を使うのが当然だ、日本の古い寺や民家に親しみを感じる、などは長期間80%を超える人に支持されており、日本人の基本的な生活意識と言ってよいだろう。

2. 震災は意識に影響を与えたか

今回の調査は、2011年に発生した東日本大震災の後、初めての調査で、震災がどう影響したかが注目されたが、これまでと異なる方向に変化した意見はわずかであった。具体的には表8に挙げた通りで、これまで増加していたが初めて減少したものの、減少していたが初めて増加したものは5項目のみである。

表8 初めて変化の方向が変わった項目

質問	選択肢	増減							
		73～ 78年	78～ 83年	83～ 88年	88～ 93年	93～ 98年	98～ 03年	03～ 08年	08～ 13年
第7問A	生活充実手段（豊かな趣味）	第5位	>		>	>			<
第7問D	生活充実手段（なごやかなつきあい）	第4位				>		>	<
第26問	理想の人間像	《権利型》				<			>
		《実用型》		>				>	<
第39問	政治に対する有効性感覚（世論）	《やや強い》		>	>		>		<

※「<」は5年間で増加したことを、「>」は減少したことを示す（信頼度95%）

表9 08年と変化の方向が異なる項目

質問	選択肢	増減							
		73～ 78年	78～ 83年	83～ 88年	88～ 93年	93～ 98年	98～ 03年	03～ 08年	08～ 13年
第7問D	生活充実手段（なごやかなつきあい）	第4位				>		>	<
第8問	理想の家庭	《夫婦自立》				<		>	<
第9問	人間関係（親せき）	《全面的つきあい》		>	>		>	<	>
第26問	理想の人間像	《規律型》	<	<	>		<	<	>
		《実用型》		>				>	<
第38問	政治に対する有効性感覚（デモなど）	《強い》	>	>	>		>	<	>
		《やや強い》	>	>		>		<	>
		《やや弱い》	<	<		<	<	>	<
第40問	政治課題	《秩序の維持》	<		>	>		<	<
		《経済の発展》	<	>	>	<	<	>	<
		《福祉の向上》	>	>	<		>	<	>
第42問	支持政党	自民党以外	>		>	<	>	>	<
第43問	支持できそうな政党	自民党	<		<	>	<	<	>
		自民党以外			<		>	<	>
		支持なし			<	<	<	>	<

※「<」は5年間で増加したことを、「>」は減少したことを示す（信頼度95%）

また今回、08年とは逆の方向に変化したものは全部で15項目あった。領域としては政治関連の質問が多く、15項目という数も08年までと比べて特に増えてはいない（表9）。

このように調査結果全体としては、これまでの傾向と大きくは変わっていない。例えば、震災後に「絆」という言葉がよく聞かれるようになった。結婚情報を紹介している会社への問い合わせや入会が増えたとも言われる。しかし調査結果では、必ずしも結婚する必要はないという人がこれまでと変わらず増えている。また、宗教や信仰に関係することを信じている人は、これまでと比較して大きな変化はない。本文では触れなかったが、臨時収入があった場合に思い切りよく使ってしまうという人も、将来

に備えて貯金しておくという人もともに変化していない。このように、「日本人の意識」調査でとらえている意識領域においては、東日本大震災の顕著な影響が表れているものはない。ただし、調査を実施した時点で震災から2年半が経過しており、いったん変化した意識が元に戻った可能性もある。また、個々の質問では何らかの形で結果に影響が出ていることも考えられる。これらについては今後の分析の中でさらに検討が必要だと考えている。

（たかはし こういち/あらまき ひろし）

注）政治意識月例調査

<http://www.nhk.or.jp/bunken/yoron/political/index.html>